



弘大農学生命科学部 同窓会会報

第24号

平成18年6月16日 発行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL 0172-36-2111
FAX 0172-39-3750
振替 02340-7-564
印刷 (株) 笹 軽 印刷



— 創立50周年記念事業への— ご協賛に深謝

同窓会長 三 上 ^{たつみ} 異

はじめに

私どもの母校、弘前大学農学部・農学生命科学部は、昭和30年（1955）年に創立されて以来、昨・平成17年7月1日に学部創立50周年という誠にもって記念すべき大きな節目を迎えたのであり

ます。これも偏に大学・学部当局のご尽力と、そして何よりも青森県・市町村・農業団体・企業等を始めとする地域・地元関係者のご協力・ご協賛あったればこそでありまして、ここに謹んで感謝・御礼を申し上げます。



生命理学実験Ⅱ（2006年5月 生物機能科学科実験室および遺伝子実験施設）

記念事業の立ち上げ

ご案内のように弘前大学は、平成16年4月から国立から国立大学法人という名もとの独立行政法人に移行しましたが、法人化後においては、以前にも増し自主・自立の基本理念のもと、特に「地域に根ざし、地域とともにある大学の構築」が強く求められるところとなりました。このような状況を踏まえ私共同窓会は、新生・農学生命科学部が名実共に地域に貢献し他に誇りうる学部として、より前進・飛躍する期待・願望を込め、学部当局並びにPTA的組織である学部後援会と共に50周年記念事業の実施を決定したのであります。

容易でない社会経済状況のもと

さて、実際に醸金活動に着手し始めてみましたところ、県・市町村・農業団体・企業等の行革や組織再編等、社会経済状況が容易でないことが影響してか、醸金活動は極めて厳しいものがありました。法人化後の大学・学部期待する地域・地域の期待・ニーズに直結する事業である「地域振興支援特別研究事業」については、是非とも実施できる方向で対処すべきであるという固い決意のもと、関係者一体となって募金活動を展開した結果、お陰様で実施可能なところまでこぎつける

ことができました。

ここに改めて醸金・ご協賛いただきました関係の皆様方に対しまして、同窓会はもとより関係者共々、衷心より深謝申し上げます。

歴史・伝統は人々の営みにより創られる

5,900余名の同窓生の皆さん！私共の学部は、往時、青森県内のりんご生産者を始めとする学部創立を懇請しての貴重な醸金協賛を礎に、これに呼応・賛同した県・市町村・農業団体等、関係者の方々の並々ならぬご苦労・ご尽力により創立・生誕の慶事を見るに至ったのであります。

爾来、半世紀を経た今日、国立から国立大学法人へと装いも新たとなった新生・弘前大学農学生命科学部への、地域・地元関係者の皆さん方が期待を込めてご協賛なされたその期待に応える意味合いからも、学部教職員・同窓生の皆さん方には、このたびの50周年を大いなる契機に、大学・学部における教育・研究面での更なる実績・成果の作出並びに同窓生各位の各々の分野でのご尽力が、結果として私共の母校・弘大農学生命科学部の新たな半世紀における歴史と伝統創りの一翼を担うのだという認識のもと、なお一層のご活躍を祈念申し上げる次第であります。



昨今 大学事情・学生気質

農学生命科学部長 高橋 秀直

“昨今の大学事情”としては、国立大学の独立法人化と“大学全入時代”の到来が知られていますが、学生の授業出席率の高さも昨今の大学事情を語る象徴的な現象です。

学生の講義出席が目立ってよくなったのは、私の記憶では10数年前から、いわゆるバブル崩壊後のことです。いまでは履修学生の殆どが、出欠を取らなくても最後まで出席します。残念ながら私の講義の魅力でなく、全国的な傾向です。

勉学熱心になったのでないことは、殆ど聴いていない、ノートを取らない、携帯でメールのやりとりをしている、という学生が少なくないことから分かります。「他にやることがないから」「不安だから」出席するらしく、「出席を取ってほしい」という、以前にはなかった要求が多くなりました。生徒にきちんとした生活習慣を身につけさせるために出欠を取っていた小中高校までの勉強スタイル、生活スタイルが大学生になっても変わ

らないことが見えてきます。大学生の「生徒化」と言われている現象です。

大学は、「生徒化」した大学生の存在を前提に教育せざるを得なくなり、講義の出欠を取ることに注力する大学が増えています。

出席が重視されれば、学生は“代返”に注力するようになります。講義の初めに出席を取れば取った後出て行く、終わりに出席を取れば終わり近くに出席する、出欠用紙を回せば友人に代筆させる、——ご存じ、出欠と代返とのいたちごっこです。身に覚えがある同窓諸氏も少なくないでしょう。

青森大学で一教員が代返防止の画期的システムを開発したことが報じられました。朝日新聞(2005.4.8)によると、出席した学生はケイタイで大学の専用サイトにアクセスし、教員がその場で告げる数字を入力すれば出席が記録されるが、そのなかからコンピュータで無作為に選ばれる学生

が口頭で出席を告げなければ代返、欠席とみなされる点がミソだそうです。いつ選ばれるか分からないので代返は効かないという訳です。

涙ぐましい代返対策というべきですが、大学でそこまでやる必要があるのでしょうか。学生に社会人・職業人としての能力や適応性を身につけさせるのが大学教育です。「生徒化」した大学生の要求に添うことを“大学全入時代”の大学の生き残り策と見なし、「出席重視」で教育するのは、休まず出勤ただけで評価してほしいという職業人を育てるようなものです。いまだき“休まず、遅刻せず、働かず”で済む職があるとは思えません。

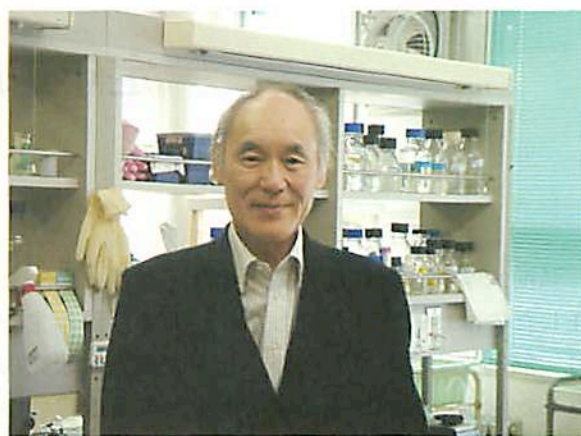
出席を取るようなことは廃止して、必要と思うなら自分の意思で出席できる学生に育てることが、あるべき大学教育の方向でないでしょうか。出欠問題は一例ですが、“全入時代”の大学教育の課題は、学生の実態と社会的要請とのズレを大学教育がいかに埋めるかにあると感じています。

定年退職教員からの寄稿～1

私はアカウンタビリティを果たしたか？

生物機能科学科 遺伝情報科学講座 新 関 稔

1981年6月、弘前大学農学部の助教授として赴任してきて、用意してくれていた南棟4階の私の研究室の椅子に腰をおろした時、これまで味わったことのない安堵感が胸に込み上げてきたのを今でも鮮明に憶えている。窓から、白神山地を奥に抱える山並、色とりどりの作物が植えられた学内圃場、そして手前に白い温室群を目にした時、ここで何か素晴らしいことが起きそうな予感さえ味わった。2年間あまりのカナダへの留学を除く15年間、私は北海道大学の農場にいて植物を見る目を十分養うことが出来たのは幸運であった。しかし、昼は学生の農場実習の手伝い、そして夜は研究というパターンの毎日を繰り返していたので、少々あきあきしてきており、その惰性を断ち切る方法はないものかと思案していた。養老孟司が、自分の周囲の世界を変えることは、たいていの場合無理なので、むしろ自分を変えれば新しい世界



実験室にて

が見えて来るといようなことを書いている。しかし、それと真正面から向かい合えば大変難物である。私にとって、自分の中身を変えるということは、悟りの境地を開くとか、修行僧が荒業を

やって新しい世界観を開くとか、多くの人が試み、多くの人が失敗してきた道であり、試みても凡人の私に出来るはずがなかった。それにこれは宇宙や自然と一体となることをも意味し、自然科学をやっている人間にとっては矛盾する。なぜなら一体となっては対象とすべき自然が見えてこないのではないだろうか。望んで弘前へ来たのは、言わば転地療法であって、それ以外の何ものでもなかった。今でも正解であったと思っている。

なによりも研究材料を育てている温室が自分の研究室から見えるということで安心出来た。私はイネ、ダイズ、タバコそしてセイヨウミヤコグサ（マメ科の牧草）を研究材料として温室で育成していたが、水やりにかなり神経を使っていた。わが子が可愛いという利己的遺伝子が働いていたのだろうか。とはいえ学生の研究材料にも水が切れていればやってあげていたのだから、人類の文化遺産である利他的要因も持ち合わせていたと自負している。昔はポットの水が切れてイネが枯れ上がってしまいそうになっているのを教授が見つけて、夏休みで実家に帰っている学生を手紙で呼び出し、義務と責任感というものを教えた偉い先生もおられたと話に聞いているが、今でもどちらがいか結論は見出していない。

1994年育種グループ（大講座制になってからこう呼んでいた）が増築された北側2階の新しい研究室に移ってからは研究のあいまいに中庭の四季の木々の移り変わりや訪れる小鳥達を見て過ごした。定年となると、おそらく他の教官も同じかも知れないが、自分の研究・教育（仕事と云った方がいいかも知れない）への自己評価が自分の身の内から浮かび上がってくる。大学教官としての己のアカウンタビリテイをはたして実践出来たかどうか自問自答するようになる。そして、私の場合は、どう見積もっても満足感の得られない忸怩たるものが残る日々を送るはめになってしまった。時既におそしである。

一方、退職後の生活設計も未だ立てていないのに、赴任してきた時のような何か素晴らしいことが起きそうな感覚はさらさらないのだが、何か楽しいことぐらいはあるだろうと楽観的感覚に身をおいている。大学法人化後は細かいことに気配りし、多少自由を奪われて息苦しさを感じ始めていたので、退職にあたって、再度安堵感を抱くことになったのは皮肉なことであった。

最後に在職中お世話になった多くの皆様に深く感謝致します。

定年退職教員からの寄稿～2

定年退職を迎えて

応用生命工学科 生体機能工学講座 武田 潔

弘前大学農学部に応用微生物学の教授として赴任したのは1993年4月でした。1997年に農学生命科学部に改組されましたが、13年間教育・研究指導した学生は学部学生、修士課程と博士課程の学生合わせて77名でした。赴任してすぐ始めた研究は、水田からのメタン放出に関わる微生物の研究でした。メタンは温室効果ガスであるのでメタン放出をいかに抑制するか地球環境問題として重要課題でした。水田は堆肥や化学肥料を施肥するし、水稻根から分泌される有機物、植物や動物の遺体など有機物が豊富にあるので土壌は還元的な



思い出の実験装置

環境になります。そこに生息するメタン生成菌群は酸素のある所では生育できない微生物なので特殊な装置を使って培養しなければなりません。有機物がメタンに分解される過程に関わる微生物を分離、培養する研究を長年しましたのでメタン生成菌群の主要な菌種を分離し、菌学・生態的特徴を明らかにすることが出来ました。メタン放出を制御するにはまだまだ残された課題がたくさんあります。

青森県の農産特産物であるリンゴの研究テーマとしてリンゴジュースの搾り粕の有効利用の研究としてメタン発酵、エタノール生産や香気物質の生産について研究しました。リンゴ搾り粕にはリンゴの香気物質が含まれています。ジュースを製造するときに加熱して酵素を変性させますがその時香気物質が気化します。それを濃縮したものがリンゴ香気物質になります。私は加熱しないで膜濃縮する方法を企業と共同研究しました。搾り粕にはフルクトース、グルコースとショ糖が含まれていますので濃縮すると粘性が高くなり、香気物

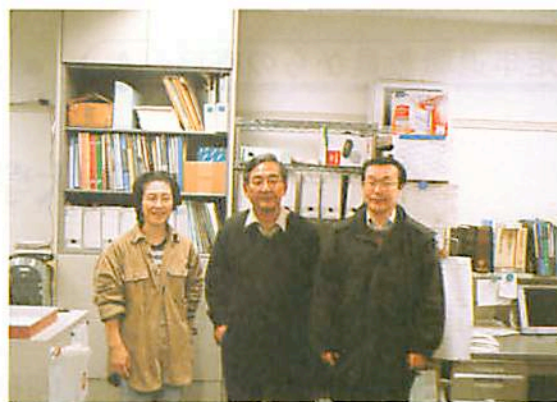
質が採取できる程の濃度にならないことが分かりましたので酵母を培養し、フルクトース、グルコースとショ糖を消費させることにしました。リンゴやブドウなどの果実からリンゴ搾り粕に含まれる糖類を消費する酵母の分離を始めたのですが、酵母が増殖する時にこれらの糖を香気物質に換える酵母が発見されました。この後も吟醸香のするアルコール製造、グルコアミラーゼ高活性の麹菌の開発やニンニク加工技術開発としてニンニク酒の製造の研究など青森県の農産物加工の研究開発をしました。リンゴ搾り粕からのメタン発酵技術は、廃棄物の有効利用であるとともにメタンを燃料にし、温水や電気に変えることが出来ます。私は青森県の農・水・林産資源を活用して産業を起こし、若い人が活躍できる地域にしたいと思ってやってきましたが、学生の教育・研究の支援はもちろんですが、研究をすすめるに当たっても同窓生、同窓会の支援を受けましたことに対して感謝しています。

定年退職教員からの寄稿～3

弘前大学での14年間

応用生命工学科 生体情報工学講座 武藤 昱

1992年の12月に旧理学部生物学科に新設された「遺伝子工学講座」に赴任して今年定年退職するまでの14年足らずの年月は、私にとってアツという間の事のように感じます。来た当初、九州育ちの私には積もる雪さえめずらしく、北東北の全てが新鮮に見えて、弘前の町もすぐに大好きになりました。新設講座でしたので優秀なスタッフも揃えることができ、思ったより早く研究室を立ち上げ研究を軌道に乗せることができたことは本当に幸運だったと思っています。私の研究分野はRNAの構造・機能に関する基礎研究ですが、その頃はまだ若くて野心もあり、弘前大学をRNA研究の日本の中心にしようというような気概をもっておりました。結果は力不足でそれには遠く



スタッフとともに（中央が筆者）

及ばなかったけれど、昨年は「日本 RNA 学会」を弘前で開催することができたりして、研究拠点のひとつくらいにはなったのではないかと思っております。

大きな変化は8年前に来ました。大学改組で理学部生物学科は農学部と一緒に新学部をつくるという計画の出発です。生物学科と農学部から5名ずつ、他学部から3名の教授が出て、現在の遠藤学長（当時医学部長）が委員長になり、新学部の構想委員会が発足し、毎週1回夜に開かれる会合は約半年続きました。最初の頃の会議は双方の思惑がもろにぶつかって荒れに荒れ、どうなることかと感じたものですが、全員が「これまでの農学部とも理学部とも違う基礎と応用を混在した形の他の大学にはない新しい学部」を作るのだという一致した目標のもとに議論を進めることができました。新学部や学科の名称、学科や講座の構成、教官の配置、学部運営の方式、カリキュラムなど激論につぐ激論を重ねた結果、現在の農学生命科学部の型ができあがったわけです。双方の中心になって構想をリードして下さったのは、農学部の中村信吾先生と理学部の沢田信一先生でした。構成する教官の顔ぶれは変わらずに新しい学科を作り人を配置するわけですから、学科のポリシーと教官の研究分野等の間に無理が生じたのは仕方がないことでした。しかし、それは10年くらいかけて自分の分野にこだわらずポリシーにあった各学科を作り上げてゆこうという合意で出発しました。それが7年たって実現されてきたかについて

は多少の危惧を感じております。当時の委員会メンバーのほとんどが退職された今日ですが、新学部発足当時の精神が今後も受け継がれてゆくことを希望いたします。

ところで、私達の研究グループは新学部では応用生命工学科の生体情報工学講座という、聞き慣れない名称の所に配属されました。農学系の方が多い学部初めて入った私は、理学部とは考え方が違うことが多くて、驚きの連続でした。しかし、広い分野の方々と交流できたことは自分にとって視野を広げることにもなり大変プラスになったと思います。また、岩手連大に加わり博士課程の学生を育てることができたこと、コラボができて広くて快適な環境で仕事できたこと、同じ講座の奥野先生のグループとよい協力関係を持つことができたこと、など大変有り難いことでした。美しい自然に囲まれ、恵まれた環境にある弘前大学は、落ち着いてじっくり研究をやるにも、情操豊かな学生を育てるにも、中央の大学よりはるかに恵まれた場所だと思います。

末筆になりましたが、これまでにご指導・ご交流をいただきました応用生命工学科の先生方、歴代学部長をはじめ多くの本学部の先生方に、これまでのご支援・ご鞭撻を厚く御礼申し上げます。今年7名の教員が退職する事になり、学部にとって新しく発展するよい機会だと思います。今後よりいっそう教育・研究に活気ある農学生命科学部に発展していくことを祈念いたします。

定年退職教員からの寄稿～4

弘前大学での思い出

生物生産科学科 園芸学講座 加藤 弘 道

私が弘前大学に赴任してきたのは1969年（昭和44）年、農業工学科の農業機械学講座の助教授ということでした。この学科は当時農学部の新設されたばかりで、それまで5名の教官がおられました。私と同時に3名、同年の5月以降に3

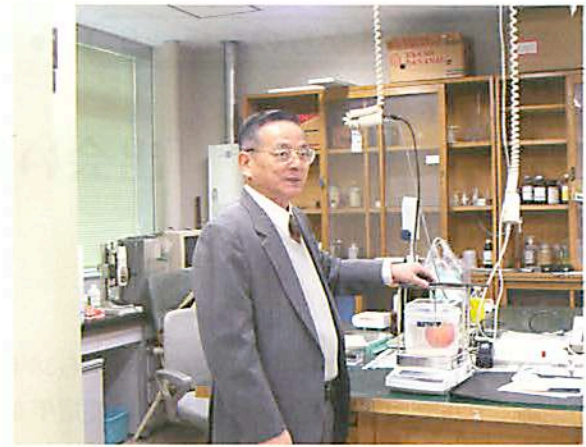
名、47年には15名の教官がそろいました。しかし、お一人がこの後すぐに若くして逝去されてからは14名の時期がしばらく続きました。この学科には5講座があり、農業土木関連の3講座と、農業機械関連の2講座（農業機械学講座と農業動力

学講座)でした。1970年度入学生からは農業機械コースと農業土木コースに分かれましたが、在生は1973年の卒業生まではコースに関係なく両コースの講義を受講し、私も卒業年度により異なりますが、年間4~6科目の講義や実験・実習を学科の全学生に担当していました。したがって、当時の卒業生とは今でも機械、土木にあまり関係なく親しくしています。また、私が卒業研究を指導した学生数もこの頃が多く、'70~'74年の5年間で23名になります。しかし、1975年以降の卒業生からは土木と機械がはっきり分かれ、機械の講義は土木の学生には選択となりましたので、私が土木の学生に講義をすることは少なくなり、土木の学生・卒業生と付き合うことも少なくなりました。

私の研究室は、'69~'72年は南側の校舎(いわゆる農業工学科の校舎)2階の森田教授の隣室でしたが、'73年からは北側の校舎(いわゆる園芸学科の校舎)の3階になりました。その後、農業経済学関連の校舎増設に伴い、再び工学科校舎の4階に移されました。

学部改組が1990年(平成2年)に行われ、本学部の講座は大講座制がとられ、工学科も農業システム工学科になり、農業土木学講座と生産機械学講座の2大講座となりました。さらに、1997(平成9)年には全学的な改組が行われ、農学部は農学生命科学部と名称変更されるとともに、理学部の生物学科からの13名と教養部からの3名を加えて4学科となりましたが、それまで生産機械学講座にいた5名の教官はばらばらに分裂させられました。すなわち、2名は土木学講座と農業経済学講座とで組織された地域環境科学科に配属させられ、他の3名の教官は生物生産科学科ですが、うち2名は園芸学講座に、残る1名は農業生産学講座に配属させられました。それに伴い、私の研究室も北側の校舎の3階に再び移されました。

私の主な研究テーマは、一つは「青果物の凍結貯蔵」で、これは1969年から始め、①凍結速度の凍結野菜への影響、②ブランチングの効果、③解凍速度の影響を明らかにすることで、③については25年ほど続けました。二つ目は、「リンゴの形状選果機の開発」と「リンゴ洗浄機」で、これは



リンゴの比重測定装置

1971年から始め1978年まで続けました。リンゴの選別はそれまで重量選別機がほとんどでしたが、包装が木箱から段ボール内にパック詰めが主流になれば、重さでなく大ききで分ける形状選別機が主流になると見通して、非接触で大きき選別を行う光学的な方法の開発を行ったものです。実用的なものを作るのにかなりの苦勞をしました。三つ目は「CA貯蔵の研究」で、これは1978年から始め、①県内に45箇所もあるリンゴのCA貯蔵庫の利用拡大を図るために、②諸野菜・果実の貯蔵条件を確立することを目的として、リンゴ(新種の北斗・つがる・紅玉)についても行いましたが、リンゴ以外の果実及び野菜(モモ、メロン、ニンニク、ラフランスなど14品目、22品種)について、主として炭酸ガスと酸素の濃度、および温度を変えた実験を行いました。そしてもう一つの主な研究テーマは、以上の研究と関連して、「農産物の物理的性質の測定」です。例えば、比熱、温度伝導率、摩擦係数、安息角の測定などがそれで、これは1969年から現在までに至っています。

研究内容に関連して、私が自慢できることでは、学内外の諸先生のご助言もあり、それまで就職できなかったいくつかの冷凍機メーカー、食品メーカー等を開拓して、卒業生を送り込めたことです。

なお、今後しばらくは弘前に在住しますが、私も妻も九州福岡の育ちですので、いずれ近いうちに福岡へ移住することになります。

定年退職教員からの寄稿～5

「出会いに感謝して」

生物生産科学科 農業生産学講座 豊川 好司

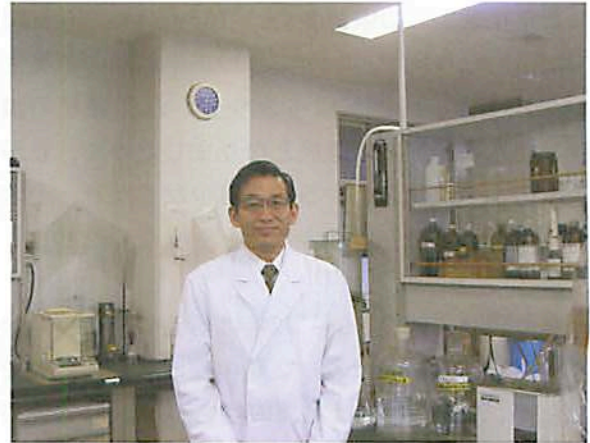
弘前大学には昭和42年、私が27歳の時から38年間勤めることができました。本学において定年を迎えられたことは、母校の研究室に戻してくれた伊東豊治先生、そして親しくご指導を頂いた多くの教授先生方のお陰と、心から感謝を申し上げます。また共にレクリエーションや酒を楽しみ、多くの友人を得ることができたことは大事な思い出となっています。

大学卒業後の4年半を青森県職員、30歳には北海道大学内地研究員、そして50歳でニュージーランド、マッセイ大学在外研究員を経験することができました。いずれも楽しく、有意義なものとして心に残っています。省みると、母校の本務には厳しくも真剣に対応してきたと思っています。弘前大学以外の県職や、他大学遊学生活の体験が、教育・研究にいくばくかの貢献を果たすことができた大きな要因になっていると感じられます。

たくさんのお出会いがあり、皆さんから大きなご支援を頂くことができました。最初の職場の地元青森県職員の皆さん、畜産学生宿泊実習受け入れ農家、国内外の学会関係者、連合農学研究科4大学の皆さん等が思い出されます。国際間ではニュージーランド・中国とは密度が高いものでした。学部長時の高校訪問では東北・北海道を先生方と分担して回りましたが、進路指導の先生方との交流が学生教育の大きな力となりました。

大学教員の使命は教育・研究であることは言うまでもありませんが、満足な成果を残すことができなかったことが心残りです。しかし、今思うと、38年間、教育・研究のために結構動き回り、その時々にはたくさんの知人を得ることができたことは私の大きな財産となったと感謝しています。

この大型連休に、気分転換が必要ということにして、長女が住んでいる奈良を訪ねて、小学2年



実験室にて

生の孫に碁を特訓してきました。外で夕食をと娘の家から100メートル位のチェーンレストランに行きました。料金を払う時、店長に「豊川先生ではありませんか？」と言われ、よく見ると、なんと9年前の卒業生、K. K. キンレイに就職し、大阪勤務と言っていた奥野峰雄君だったのでした。9年ぶりの再会ですが、なんでここでと、本当にビックリし、感動しました。この再会は天文学的確率に違いありません。私はこれまでもこのような人との繋がりを幾度か体験していますが、人との出会いはどうなっているのだろうと、不思議を感じます。多くの学生と共に学んだ出会いの中で得られた自分の経験は、どんなに小さくとも価値ある財産になっていると思っています。

退職に当たって思うままに筆を走らせましたが、人との出会いは何者にも代えがたいと、改めて感じています。

定年退職教員からの寄稿～6

定年退職しました。

生物生産科学科 農業生産学講座 工藤 啓一

3月31日、遠藤正彦学長より「明日から大学に来なくても良い」と言う、次のような人事異動通知書をいただきました。「国立大学法人弘前大学職員就業規則第21条第1項により平成18年3月31限り定年退職」という呆気ない異動内容でした。

1963年（昭38年）4月助手に採用されて以来、在職43年、学生時代を含めると実に47年（47/65＝72%）、やっと卒業出来たんだと感じております。

長かった助手時代は（～1984年）他学科教官の協力を得て行った農学実験実習、栽培と土壌分析を組み合わせた専攻実験実習が強く思い出として残っている。更に農業改良普及員研修生の受入が始まり（1965～1978年）、年上の現場に精通した研修生には大変お世話になりました。その間、大学封鎖が勃発し、教育・研究が一時途絶えたことも大きな出来事であり、農学部では「封鎖対策協議会」を設置し、対話による解決を目指したことなど、今では貴重な経験を積んだと思っている。

講師昇任に伴って、佐々木信介教授が担当していた「寒地栽培管理学」が講義の始めであった。名講義で知られている佐々木教授の後がまで全然自信はなく、範囲が広いことから土壌肥科学、昆虫学、病理学、経営学等の先生方から教えを受けながらの講義であった。

最初の頃は教科書を使わず、スライド、OHP、コピーした資料を主体に行い、更にはビデオ等の視聴覚教材も採用したが、イマイチ納得出来なかった。レポートの提出を主体にして効果を上げた時代もあったが、インターネットの普及に伴いこれも効果少なし。

最終的には、出席確認を含めてその時間内に覚えたこと三つを記載させ、これを添削して返却し、レポートについては発表させる方法で効果を上げ

たのではないかと自負している。

共生センター長併任の2年間はありがとう、いろいろお世話になりましたに尽きます。幸いにして17年度には次のようなうれしきことがありました。藤崎農場の塩崎教



日本酒「弘前大学」
（写真提供東奥日報社）

員の全国大学農場教育賞・尾崎技術職員の同技術賞受賞、研究室出身者の上級職合格（青森県農林部1名のみ採用）、日本酒「弘前大学」による学長表彰「顕彰状」受賞等である。

作物学教室の卒業生は237名、研修生20名の内、221名の卒業・研修生と調査・研究を共にし、またソフトボール、スキー等で楽しい時を過ごしたことになる。

現在は自宅裏のリンゴ園で晴耕雨読には遠く、晴耕雨整の毎日です。

玄関前に車が駐車している時は在宅です。気軽にお立ち寄り下さい。

〒036-0241 青森県平川市八幡崎宮本19

TEL0172-57-3863

学部創立50周年記念事業報告

学部創立50周年記念事業に感謝して

前農学生命科学部長

学部創立50周年記念事業実行委員長 豊川好司

同窓会の後援によって、学部創立50周年記念事業を盛大に行うことができました。創立以来半世紀に渡る大学教育・研究の足跡が刻まれ、100周年へ向けて新たな折り返し点となったと確信しています。

顧みると、学部創立以来幾多の改革と充実が行われてきましたが、最も注目された改革は最近の平成9年10月1日施行の農学生命科学部創設と考えられます。ご承知のように、弘前大学の農学系分野と生物系分野が合同され、わが国で例を見ない基礎から応用までの教育・研究分野が網羅され、1学年の学生数は185名と増え、旧国立大学農学系学部としては中規模学部に加大されました。本学部建学の精神は地域の生物産業振興に寄与できる人材教育と研究開発に基礎が置かれていますが、高等教育の教育研究体制充実への絶えざる取り組みが、弘前大学をあげて推進されてきた半世紀の歴史的成果と考えられます。

50周年に企画された記念事業として、記念式典、地域振興支援特別研究事業、農学生命科学部50年史出版、校内環境整備等が行われました。この中で特に重視された事業は地域振興支援特別研究事業です。農学部・農学生命科学部が創立以来50年間蓄積してきた知識を基に、今地域において早急に解決が求められている実用的課題を3年間の研究期間で解決することを目的に立ち上げた事業です。本事業への学部教員の自主的参加は、科学研究費などで大きな研究を行っている教員が多い中

で、教員の70%が参加し、19課題が計画され、実施されました。大学は基礎研究が主体ですが、本応用研究への多くの参画は基礎研究に裏づけされた応用研究であり、成果が大いに期待されています。

社会が大学教育に期待することはどんな人材が輩出されるかにあります。言うまでもなく未来のあるべき社会を創り出す人材養成です。端的には大学の評価は卒業生の社会貢献に係っており、社会のために役立っているという共通認識が求められています。そこには学生を教育し、社会に送り出す教員の使命が計り知れない大きなものがあります。同窓会后援の本学部の50周年記念事業、特に地域振興支援特別研究に対する教員の全学的取り組み体制には、発展する大学としての期待があります。

国立大学法人・弘前大学農学生命科学部の将来は、清白な同窓生の温かい学部支援と、教員の教育力、学生・教員相互の感化力等、三者が一体となって果たされると思われま。

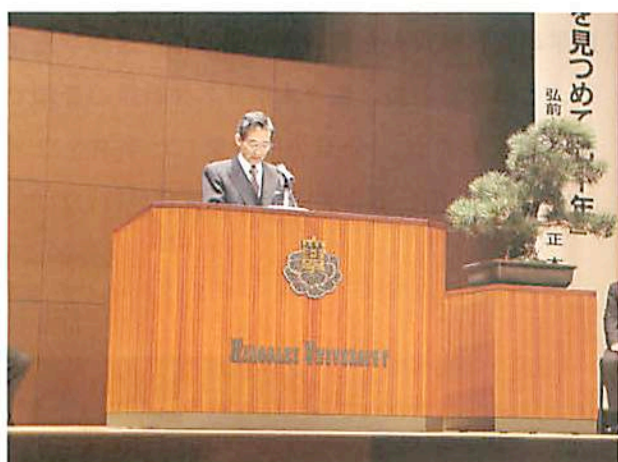
最後に、素晴らしい大学づくりのために、青森県に縁の深い新渡戸稲造博士の言葉を引用したいと思います。大学教育にとって最も大切なことは、「知識よりも品性を、人材よりも人物を」と言っています。紳士であれと言うことですが、「紳士とは、自らを律すことができ、思いやりのある人格」と思われま。

学部創立50周年記念式典・記念講演・記念祝賀会を開催

学部創立50周年記念式典が平成17年7月2日午後1時から弘前大学創立50周年記念会館において、学内外から150名余の参加者を得て行われた。式典では豊川好司学部長の式辞、遠藤正彦学長の挨拶の後、三村申吾青森県知事、金澤隆弘前市長ならびに種市一正青森県農協中央会会長から御祝辞を賜った。次いで、大学院修士課程に在学する伊勢崎奈々さんが在学生代表のこたばを述べた。最

後に、同窓会が中心となって募った地域振興支援特別研究事業費に関する寄付目録が三上巽同窓会長から豊川学部長に贈呈されて式典は終了した。

式典に続き、原田幸雄名誉教授が「農学部・農学生命科学部のあゆみ」と題して創設時から今日に至る学部の歴史を多数の写真で紹介した。次いで、正木進三名誉教授による「虫を見つめて70年」と題する記念講演が行われた。



豊川学部長の式辞



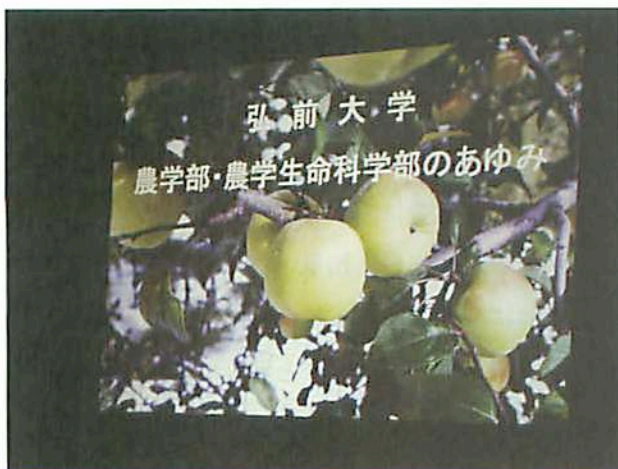
遠藤学長の挨拶



三上会長から豊川学部長への寄付目録の贈呈



式典会場



原田名誉教授が学部の歴史を解説した



正木名誉教授による記念講演

その後、会場を弘前駅前のシティ弘前ホテルに移し記念祝賀会が行われた。三上同窓会長の挨拶の後、木村徳英青森県りんご協会会長、佐々木忠一青森県工業会会長、雑賀優岩手大学大学院連合

農学研究科科長から御祝辞を賜った。遠藤学長等による鏡開きの後、佐々木信介名誉教授の音頭で乾杯が行われた。全国から参集した卒業生など220名余が参加し盛会裏に記念祝賀会が行われた。



附属金木農場産酒米「豊盃」で醸造した日本酒の鏡開き



祝賀会会場風景

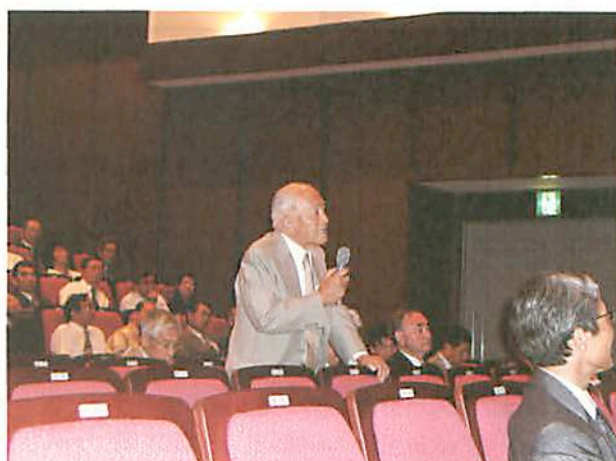
青森県りんご植栽130周年・弘前大学農学生命科学部 創立50周年記念シンポジウムを開催

記念式典会場では式典当日午前10時から「島善鄰と弘大農学部創設ー「りんごの恩人」の業績から引き継ぐことー」と題する記念シンポジウムが、神田健策教授をコーディネーターとし、島先生にゆかりのある木村徳英（青森県りんご協会会長）、

阿部彌之（岩手県立大船渡農業高校長）、奥瀬一郎（元弘前大学農学生命科学部教授）、原田幸雄（弘前大学名誉教授）、一木茂（元青森県りんご試験場長）の各氏をシンポジストとして開催された。



シンポジウム風景



当時の思い出を語る佐々木信介名誉教授

50周年記念植樹

平成17年8月8日には、50周年を記念してヒバ（青森県林業試験場から提供された）が学部中庭に植樹された。近くには、学部創設時の1955（昭

和30）年に古市誠学部長と島善鄰教授により植樹されたイトヒバがある（関連記事が弘前大学同窓会報第7号6ページにある）。



植樹風景

農学生命科学部創立50周年記念事業 会計報告 (平成18年3月31日まで)

1. 収入の部

費目	決算額(円)	備考
醸金	16,203,000	醸金者累計806名
祝賀会費	104,000	5口以下の参加者13名
同 祝儀	220,000	18名
合計	16,527,000	

2. 支出の部

費目	決算額(円)	備考
式典・祝賀会等	2,037,138	内訳 100,000 シンポジウム謝礼・旅費 250,000 式典演奏・特別講演謝礼 1,636,840 祝賀会経費等(5口以上の参加者151名分の費用を含む) 25,298 消耗品代 25,000 人件費

費目	決算額(円)	備考
記念誌	0	現在作業中
地域振興支援事業	7,500,000	平成17年度分
事務経費等	1,686,205	内訳 1,557,155 趣意書等印刷代・送料(3回分) 75,850 醸金等振込手数料 8,000 企業等へ依頼文書送付代 42,000 慰労会補助 3,200 学生アルバイト代
合計	11,223,343	

平成18年3月31日までの残額(収入-支出)5,303,657円は、記念誌の印刷代(予算300万円)と発送代として支出し、残額は全て地域振興支援研究事業へ使用させて頂く予定です。本事業の会計監査は平成18年4月24日農学生命科学部総務係長の成田明氏にお申し、承認を得ております。

現在、記念誌の発刊に向けて作業をしております、7月1日には完成の予定です。発刊が遅れておりますことは深くお詫びを申し上げます。

なお、「地域振興支援事業」に対する協賛金は、同窓会による支援も含めまして21機関・団体・企業・関連受託等で1,739.2万円(平成17年度末まで)頂いております。(文責 工藤明)

トピックス

日本技術者教育(JABEE)の認定を取得!



JABEE 認定証

地域環境科学科では、JABEE の認定基準に対応した農業土木プログラムを2002年度より立ち上げ、学習・教育目標を具体的に示すと共に、それらの目標を達成するためのカリキュラム整備、本プログラムへの要望を把握するため学生や卒業生さらに職場の上司

に対するアンケート調査、学外の評価委員会によるシステムの見直しなどを継続的に行ってまいりました。2005年度に本プログラムの認定を申請しましたところ、2006年5月8日付で JABEE 認定技術者教育プログラムとして認定されました。

(JABEE の詳細は同窓会報第23号に掲載) 同窓生の皆様にはご協力を頂きまして有り難うございました。今後とも宜しくお願い致します。

申請学部等：農学生命科学部地域環境科学科
認定プログラム名：農業土木プログラム
認定分野：農業工学関連分野

(文責： 地域環境科学科 工藤明)

農学生命科学部の今

研究・教育最前線


3回シリーズで農学生命科学部の今をお伝えする2回目

小原 良孝

担当専門教育科目：動物細胞遺伝学、細胞生物学
 担当大学院科目：細胞系統進化学
 専門分野：動物細胞遺伝学、染色体細胞学
 主要研究テーマ：染色体分染法による小・中型哺乳類の系統縁関係
 野生動物の染色体分析による環境汚染地域の遺伝的影響評価に関する研究

原田 竹雄

担当専門教育科目：分子生物学、植物遺伝子工学
 担当大学院科目：植物分子育種学
 専門分野：植物分子育種学
 主要研究テーマ：育種におけるDNAマーカーの開発
 遺伝子操作による作物の改良


 生物機能科学科
 遺伝情報科学講座

石田 幸子

担当専門教育科目：発生生物学、実験形態学
 担当大学院科目：動物発生学
 専門分野：動物発生学
 主要研究テーマ：プラナリアの胚発生・再生機構の解明
 プラナリアの分布・種分化に関する研究

石川 隆二

担当専門教育科目：基礎遺伝学、植物育種学
 担当大学院科目：遺伝子機能解析学
 専門分野：植物育種学
 主要研究テーマ：イネにおける可動因子、トランスポゾンによる易変異系統の解析
 農業形質に関わる遺伝子のクローニングと解析

吉田 渉


担当専門教育科目：遺伝情報科学実験Ⅱ
 専門分野：分子発生学、分子系統分類学
 主要研究テーマ：胚発生、特に幼生の変態並びに体軸形成機構の分子生物学的研究
 再生に関わる遺伝子群の検索

橋本 勝

担当専門教育科目：生物有機化学、コンピュータ分子設計学
 担当大学院科目：生物有機化学
 専門分野：天然物有機化学
 主要研究テーマ：エンドグリコシダーゼ機構解明を
 目指した硫黄置換オリゴサッカライドの合成研究
 リンゴ果実におけるマイコパラサイト現象の化学的解明

宮入 一夫

担当専門教育科目：生化学Ⅰ、タンパク質工学
 担当大学院科目：タンパク質工学
 専門分野：生物化学、タンパク質工学
 主要研究テーマ：微生物由来ペクチン質分解酵素の構造、機能、利用
 キノコ由来生理活性タンパク質の構造と機能


 応用生命工学科
 生体情報工学講座

姫野 俵太

担当専門教育科目：遺伝生化学、生体高分子構造化学
 担当大学院科目：生体高分子システム学
 専門分野：生化学、分子生物学
 主要研究テーマ：トランス・トランスレーションの分子メカニズムの研究
 リボソーム小サブユニットで活性化されるGTP加水分解酵素の研究

高田 晃

担当専門教育科目：分子機能化学、機器分析学
 担当大学院科目：分子機能化学
 専門分野：天然物化学、作物生理学
 主要研究テーマ：一回結実性老化に関する研究
 抽だいに関する研究

牛田 千里

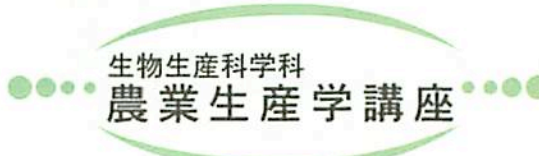
担当専門教育科目：分子情報工学
 担当大学院科目：RNA学特論
 専門分野：分子生物学
 主要研究テーマ：発現RNomicsシステムの開発と新規ncRNAに関する研究、Functional RNomics
 ヒトスプライシング因子に関する研究

杉山 修一

担当専門教育科目：作物学汎論、情報統計処理学
 担当大学院科目：生物情報処理学
 専門分野：植物遺伝生態学
 主要研究テーマ：葉の大きさと形を決めるメカニズムとその進化
 地球温暖化に対する植物の適応ポテンシャル

鈴木 裕之

担当専門教育科目：畜産学汎論、家畜繁殖学
 担当大学院科目：家畜改良増殖学
 専門分野：家畜繁殖学、家畜発生工学
 主要研究テーマ：哺乳動物卵の成熟と活性化に関する研究
 哺乳動物初期胚の割球の極性化と全能性に関する研究



生物生産科学科
農業生産学講座

松山 信彦

担当専門教育科目：食用作物学、寒地栽培管理学
 担当大学院科目：作物栽培方法論
 専門分野：栽培環境学、土壌環境学
 主要研究テーマ：非アロフェン質黒ボク土の土壌管理に関する研究
 アロフェン質黒ボク土の酸性化メカニズムに関する研究

松崎 正敏

担当専門教育科目：家畜生産学、家畜栄養学
 担当大学院科目：飼料利用学
 専門分野：家畜飼養学
 主要研究テーマ：初期成長期の栄養制御による家畜の生産能力の向上
 飼養管理によるホルモン系の変化と反芻家畜の生産性への影響解明

福地 博

担当専門教育科目：生産機械学概論、生産機械システム学
 担当大学院科目：農業生産機械学
 専門分野：生産管理システム学（農業機械学）
 主要研究テーマ：スピードスプレーヤの散布精度向上に関する研究
 リンゴ収穫の機械化に関する研究

谷口 建

担当専門教育科目：地域計画学、地域交通工学
 担当大学院科目：地域環境計画学
 専門分野：地域計画学
 主要研究テーマ：グリーン・ツーリズムの研究
 農村地域の道路整備の研究

高橋 照夫

担当専門教育科目：地域環境情報学、農林システム学
 担当大学院科目：地域環境情報工学
 専門分野：農業情報工学、地域環境情報学
 主要研究テーマ：農業情報データベースの利用システムの開発・改善に関する研究
 農業情報の共有と活用を図るためのネットワークシステムに関する研究



地域環境科学科
地域環境計画学講座

藤崎 浩幸

担当専門教育科目：応用自然環境学、景観生態学
 担当大学院科目：農村環境整備学
 専門分野：農村計画学、農村環境整備学
 主要研究テーマ：水田整備のあり方
 農村や農業の学習や観光への利活用

檜垣 大助

担当専門教育科目：環境基礎構造学、山間地環境計画学 I
 担当大学院科目：山地流域保全学
 専門分野：山地環境計画学
 主要研究テーマ：応用地形学的な砂防計画手法の立案
 山岳発展途上国を対象とした地域の環境・社会に合った防災対策

支部だより

平成17年度福島支部「わんどの会」総会報告

2006年2月24日（金）19時より福島市飯坂温泉みちのく荘にて、平成17年度福島支部総会・懇親会が開催されました。出席者は9名で、大学からは同窓会幹事の依頼で加藤弘道（園芸機械）が出席しました。

最初にわんどの会会長の国分俊行氏（農地51年卒）から活動・経過報告があり、記念写真撮影の後、畠澤國美名誉会長代理（農工43年卒）の乾杯音頭で懇親会が開かれました。参加者のほとんどが県庁、試験場、市役所に勤務の方々で、懇談される内容もこれからの農業、研修のあり方などについて熱く語り合われていました。しばらくして、

私から独立法人化後の大学の現況と問題点、昨年行われた50周年記念事業のこと、退官する7名の先生の話などをいたしました。この後懇親会は場所を変えての二次会にまで及びました。

翌日は、尾形正さん（植理51年卒）から果樹試験場内を懇切丁寧に案内していただきました。その後国分さんから、源義経ゆかりの医王寺、片岡鶴太郎美術庭園等を案内していただき、大変有意義な半日を過ごすことができました。今後、福島支部がますます発展し、会員相互の親睦が深まるよう期待しています。

（加藤弘道記）



福島支部総会に参加した皆さん

平成17年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成17年度の弘前大学卒業証書授与式が平成18年3月23日午前10時から弘前市民会館で行われた。農学生命科学部の卒業生は180名であった。大学院の学位記授与式は午後1時から弘前大学創立50周年記念会館で行われ、農学生命科学研究科修了生48人に対して、修士（農学生命科学）の学位が授与された。平成17年度末現在で、農学部と農学

生命科学部を合わせての卒業生は5,455人に、研究科の修了生は農学研究科と農学生命科学研究科を合わせて572人になった。

授与式終了後、同窓会主催で、恒例の記念写真撮影（校舎正面玄関前）および祝賀会（大学会館）が行われた。

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。

生物機能科学科（卒業生数36人）

ヤマモト食品(株)、マックスバリュ東北(株)、農業(自営)、(株)丹波屋、環境保全(株)、(株)サンデー、(株)ユニバース、ダイエー観光(株)、弘前大学医学部、(株)M.F. ノースジャパン、名古屋製酪(株)、(株)ロイズコンフェクト、東京スマイル農業協同組合、高見(株)、(株)テッセイインターナショナル、(株)ホープ、(株)御きもの処かど屋、(株)ト一屋、農業、グルメライフ販売(株)、弘前大学大学院(13)、千葉大学大学院、奈良女子大学大学院、大阪府立大学大学院

応用生命工学科（卒業生数48人）

JAアオレン、岩手缶詰(株)、(株)テレウェイヴ、朝日ユニバーサル貿易(株)、全農青果サービス(株)、(株)山畜、(株)OSG コーポレーション、ロッテスノー(株)、菅野漬物(株)、北海道酪農検定検査協会、(株)東京めいらく、(株)ヤマダフーズ(2)、(株)ブックス弘前、日本生命保険相互会社、(株)メディック、六花亭製菓(株)、大日本住友製菓(株)、(株)サト一商会、森永乳業(株)、ツルハドラック、(株)ニチレイフーズ、(株)苫小牧臨床検査センター、札幌市北陽中学校、北海道大学大学院(3)、弘前大学大学院(13)、東北大学大学院、筑波大学大学院、金沢大学大学院、九州大学大学院、九州工業大学大学院、奈良先端科学技術大学院(2)、青森大学大学院

生物生産科学科（卒業生数41人）

弘前中央青果(株)、一正蒲鉾(株)、山水園、仙台文理、山崎製パン(株)(2)、積水ハウス(株)、JA松本ハイランド、赤塚植物園(株)、ホームマック(株)(2)、東日本旅客鉄道(株)、スナダ種苗農材、(株)ユニバース、東北マツダ、(株)十文字チキンカンパニー、センコー(株)、日本郵政公社小川郵便局、森久保薬品(株)、マックスバリュ東北(株)、アグリシステム(株)、岩手県立高田高等学校、青森県警、航空自衛隊、弘前大学大学院(16)、名古屋大学大学院

地球環境科学科（卒業生数35人）

藤村器機(株)、農業(自営)(3)、青森予備校、(株)シバタ医理科、沖縄電力(株)、セック(株)、福島県土地改良事業団体連合会、奥村組土木興業(株)、(株)ソフィクス、(株)シジシージャパン、クレストグループ、(株)リードコナン、(株)やまや、アークランドサカモト(株)、(株)NIPPO コーポレーション、日本郵政公社、(株)パナホーム愛岐、(株)丹波屋、(株)ニュートン・ファイナンシャル・コンサルティング、伊徳(株)、旭化成ホームズ(株)、(株)ユニバース、秋田ダイハツ販売(株)、(株)札幌通運、北海道労働金庫、不動産業、弘前大学大学院(7)

大学院農学生命科学研究科（修了者数44人）
 紅屋商事、岩手大学農学部、東北大学医学部、ア
 スザックフーズ(株)、北海道システムサイエンス、
 びすとろ弦や、かねさ(株)、(株)ワダカン、ア
 キュンメンバイオフィーマ(株)、(株)グッドウィ
 ル・エンジニアリング、北海道農業協同組合連合
 会、(株)メディネット、(株)VSN、(株)日本食研、
 新日本科学(株)、極東製薬工業(株)、私立函館白
 百合学園中学高等学校、合同酒精(株)、エムバイ

オテック(株)、(株)日本ウエンディーズ、ユニ
 テックフーズ(株)、(株)中部衛生検査センター、
 (株)東京めいらく、(株)メンテック、JA とまこ
 まい広域、医学出版、森の中の果樹園、博報堂
 (株)、(財)福島県保健衛生協会、明治コンサルタ
 ント(株)、(株)東和銀行、(株)建設技術研究所、
 独立行政法人 土木研究所、(株)東亜石油、(株)
 トップツアー、岩手大学大学院連合農学研究科
 (8)、京都大学大学院理学研究科

新任教員の自己紹介



高 田 晃 助教授（生体情報工学講座）

はじめまして。4
 月1日付で応用生命
 工学科の助教授とし
 て着任いたしました
 高田です。私は名大

院理を卒業後、助手として名大院理・慶大理工・
 北大院農を転々としながら、生物有機化学研究に
 従事してきました。

本学では前任地の北海道大学農学部で学んだ知

識と技術を生かし、作物生理学の研究を続けてい
 きたいと考えております。具体的には作物の生育
 ステージを制御する内性因子を探索し、それを用
 いた生長制御機構の解明・作物の高機能化手法の
 考案へと基礎的分野から農学的・応用的分野まで
 多面的に研究を展開していきたいと考えておりま
 す。

皆様にはご迷惑をお掛けすることもあるかと存
 じますが、よろしく願いいたします。



田 中 和 明 助教授（環境生物学講座）

2006年1月1日付
 で環境生物学講座
 （植物病理学教室）
 に着任したばかりで
 すが、弘前大学には

大学院修士課程からお世話になっております。在
 学中は自分の好きな研究だけに没頭し、弘前につ

いては、やがて去る土地だからとやや距離を置いて眺めてきたような気がします。これからは地域
 社会に少しでも貢献できるよう、研究・教育に取り組みたいと思いますので、ご指導下さいませよう
 宜しく御願ひ致します。

松崎 正敏 助教授 (農業生産学講座)



本学農学部農学科卒業、農学研究科修士課程修了の同窓生です。これまでは農林水産省系の試験研究機関で牛の成長に伴うホルモン分泌と脂肪蓄積や牛肉品質などとの関連を研究してきました。最近、胎子期や新生子期の栄養や成長履歴がその

後の生理機能(体質)を左右するというプログラミング現象に興味を持っています。学生諸君の希望やエネルギーを励みに、母校でもう一度勉強し直してみたいと思っています。千葉は外房出身の元高校球児、乗馬愛好家です。近頃は運動不足でメタボリックシンドローム予備軍ですので、お花見で“出身”をやるのは厳しそうです。よろしくおねがいします。

教員人事

退職

平成18年3月末

新関 稔 教授 (遺伝情報科学講座)

武田 潔 教授 (生体機能工学講座)

武藤 昱 教授 (生体情報工学講座)

加藤 弘道 助教授 (園芸学講座)

豊川 好司 教授 (農業生産学講座)

工藤 啓一 助教授 (農業生産学講座)

牧田 肇 教授

(附属生物共生教育研究センター)

昇任

鈴木 裕之 教授 (農業生産学講座)

平成17年7月

原田 竹雄 教授 (遺伝情報科学講座)

平成18年5月

姫野 俵太 教授 (生体情報工学講座)

平成18年5月

松山 信彦 助教授 (農業生産学講座)

平成18年6月

新任

田中 和明 助教授 (環境生物学講座)

平成18年1月



事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号(2005年6月1日発行)の10ページにあります。

同窓会ホームページ(<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)からもダウンロードできます。

会費納入と住所通知のお願い

平成17-18年度会費5,000円を未納の会員におかれましては、同封致しました振込用紙で、お納め下さいますようお願い致します。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤 明 電話 0172-39-3842 (FAX 兼用) E-mail akudo@cc.hirosaki-u.ac.jp

戸羽 隆宏 電話 0172-39-3786 E-mail ttakki@cc.hirosaki-u.ac.jp

加藤 幸 電話 0172-39-3869 (FAX 兼用) E-mail kato@cc.hirosaki-u.ac.jp

五十嵐康雄先生のご逝去を悼んで

五十嵐先生には病氣療養をなさっておられましたが、入院先の病院で2005年11月13日にご逝去なさいました。先生は1965年に北海道大学農学部畜産学科をご卒業後、直ちに農学部園芸化学科に助手として赴任なさいました。その後、1986年には助教授に、2004年には教授に昇任なさいました。この間、学部や大学院の講義をはじめ、卒業研究や修士研究の指導をなさってこられました。先生の温なお人柄を慕う学生は多く、優に300名を超える学生が先生の研究室から育ちました。先生は畜産物利用学をご専門とされ、最近は「カゼイン成分の迅速分離法」、「カゼインの新規利用法の開発」ならびに「牛乳中のタンパク質分解酵素の機能」等の研究をなさり国内外の雑誌に多くの論文を発表なさっておられました。入院先で学生への研究指導について御指示を仰いだ折、何時に無く雄弁にご教示をいただいたことを昨日のように思い出します。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(文責：戸羽隆宏・長田恭一)



在りし日の五十嵐先生

訃報

高橋 俊行先生 (元教授、農業機械学講座) 平成17年3月ご逝去
 奥村 實義先生 (元教授、園芸農学講座) 平成17年7月ご逝去
 沢田 公子様 (土肥昭56年卒)
 須藤 山路様 (植病昭36年卒)
 赤渕 邦夫様 (農経昭40年卒)

上記の会員がご逝去なさいました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

写真でみる農学生命科学部この1年



オープンキャンパスが行われ多くの高校生が訪れた (2005年8月9日)



収穫祭が行われ訪れた市民で賑った (2005年10月29~30日)



今年も昨年に負けず大雪だった (2006年1月下旬)



平成18年度入試では、初めて札幌と八戸でも入試が行われた (2006年2月25日)



監視カメラが設置され安全性が向上か (2006年5月)



農学生命科学部正門からの車両の出入りができなくなった (2006年5月)